

—一般論文—

## 大学生のインターネット・携帯電話の利用状況と友人関係との関連

杉浦春雄<sup>1</sup>、高橋知代<sup>2</sup>、杉浦浩子<sup>2</sup>

**要約：**本研究では、大学生のインターネット・携帯電話の利用状況と友人関係との関連について検討した。大学生 270 名に対して質問紙調査(インターネット・携帯電話の利用状況, 学生用ソーシャルサポート尺度)を実施し、233 名(回収率: 86.3%)の回答が得られた。その結果、大学生においてはネット上で他者と交流をしている実態はあるが、それに傾倒していることはなく、日常の友人との交流も活発であった。そして、それぞれの友人には相応のサポートを期待し、上手く活用していると考えられた。

**索引用語：**インターネット、携帯電話、友人関係、大学生

## Internet/Mobile Phone Usage and Friendship among University Students

Haruo SUGIURA,<sup>1</sup> Kazuyo TAKAHASHI<sup>2</sup> and Hiroko SUGIURA<sup>2</sup>

**Abstract:** Investigation was made of the relationship between Internet and mobile phone usage and friendship among university students. Two surveys questionnaire (i.e., "Internet and Mobile Phone Usage" and "Social Support Scale for University Students") were administered to 270 university students (response rate: 86.3%). It was determined that although university students exchange ideas with each other over the Internet, students do not devote themselves intellectually to the interaction. It was observed that respondents had considerable daily interaction with friends. It was also noticed that university students expected support of some kind when communicating with friends, and students made good use of whatever support they received.

**Keyphrases:** Internet, mobile phone, friendship, university students

### 1. 緒 言

インターネット（ネット）や携帯電話では双方向通信が容易で、メール、チャット、掲示板などの選択によりユーザーの好みとニーズに合わせたコミュニケーションが可能である。このようなコミュニケーションツールとしての有用性は、学校やアルバイトなど対面状況で知り合う友人以外に、ネットや携帯電話をきっかけに知り合う友人との新たなタイプの人間関係が生じさせる要因となっている。こうしたネット上での人間関係については、これまで

に種々検討されている。否定的意見としては、ネット上の人間関係は、対面状況で知り合った人間関係よりも希薄で質の劣るものであること、ネット上の対人関係に時間を使うほど日常の友人関係が希薄化する可能性があること、また、ネットのヘビーユーザーにおいて孤独感や抑うつ感が高まることが明らかにされている<sup>1-3)</sup>。一方、肯定的意見としては、匿名性が確保されているネットは年齢、性別、社会的地位を超えた新しい交友関係が構築されやすく良好な人間関係が築かれていること<sup>4,5)</sup>、現実世界で見知ら

<sup>1</sup> 岐阜薬科大学専門教育大講座解剖学研究室（〒502-8585 岐阜市三田洞東5丁目6-1）

*Laboratory of Anatomy, Gifu Pharmaceutical University  
(5-6-1 Mitahora-higashi, Gifu 502-8585 JAPAN)*

<sup>2</sup> 岐阜大学医学部看護学科（〒501-1194 岐阜市柳戸1-1）

*Nursing course, School of Medicine, Gifu University  
(1-1 Yanagido, Gifu 501-1194 JAPAN)*

ぬもの同士であってもネット上で友情をはぐくむことができる可能性があること<sup>6)</sup>が指摘されている。さらに、ネット上の友人は日常の友人と同様にかけがえの無いもので、孤独感を軽減させてくれる存在であり<sup>7)</sup>、ネット上の対人関係は対人スキル、精神的健康に良い影響及ぼすという研究結果もある<sup>8)</sup>。また、ソーシャルサポートのサポート源としてネット上の友人が有効に機能している可能性も見出されている<sup>8)</sup>。ここ数年の間にmixiやGREEなどのソーシャルネットワーキングサービス (SNS) が世界中で爆発的に広がっている。これは人と人とのコミュニケーションを重視し、ネット上に新たな人間関係構築の場を提供するものである。総務省調査によれば<sup>9)</sup>、2006年3月末現在の日本でのSNS利用者数は716万人に達し、これは前年度の約6.5倍である。SNS利用者の急増の理由として、SNSは同じ目的で集まった仲間で構成されているため、コミュニケーションのとりやすさと安心感が得られることが挙げられている。このように、ネット上で人間関係を構築する場や方法は大きく変化してきていることから、ネット上での人間関係の持ち方や発展の仕方、ネット上で知り合って人々への期待も変化してきていると考えられる。

そこで、本研究はネット利用率も高く、SNSの利用者が最も増加している大学生を対象にアンケート調査を行い、ネットやSNSの利用状況とネット上での友人関係の構築の実際を明らかにし、サポート期待感からネット上の友人の位置づけについて検討することを目的とした。

## 2. 対象と方法

### 1. 対象

大学生270名のうち、有効回答者233名(有効回収率: 86.3%)を分析対象とした。

### 2. 調査方法

対象者に対して質問紙調査の趣旨説明と協力依頼を行い、質問紙を配布した。回答は無記名とし、その場で回収、または後日回収ボックスに提出してもらった。

### 3. 調査内容

#### 1) 基本的属性

年齢、性別、自宅または一人暮らしを質問した。

#### 2) 携帯電話・ネットの利用

携帯電話・パソコンの保有、ネットの接続の有無・利用場所・利用頻度(1日・1時間)・利用目的、1日のメール送信数、SNSやメーリングリスト(ML)等での他者との交流の有無、ネットや携帯電話をきっかけに友人作りの経験や希望の有無を質問した。

#### 3) 友人について

対面状況で知り合い出来た「友人」の数、ネットや携帯電話をきっかけに知り合い出来た「友人」の数、ネットや携帯電話をきっかけに知り合った「友人」との関係の変化

(会ったことは無いがメールなどでやりとりをする・会ったことはないが電話をする・会ったことがある・よく会う・親友になった)を質問した。

#### 4) 友人へのサポートの期待感

情緒的サポートを主に測定する学生用ソーシャルサポート尺度<sup>10)</sup>の項目を一部修正したものを用いた。16の状況を設け、それぞれの状況でネット上の友人、日常の友人に援助を受けられると思うかを尋ねた。

### 4. 分析方法

統計処理には、SPSS ver. 12.0を用い、t検定および $\chi^2$ 検定を行った。有意水準は5%とした。

### 5. 倫理的配慮

調査の趣旨説明の際に、口頭で協力は自由であること、協力の有無による利益や不利益は生じないこと、無記名でありプライバシーは守られること、回答の提出をもって同意が得られたとみなすことを説明し、質問紙にもその内容を記した文書を添付した。

## 3. 結果

### 1. 対象者の属性

対象者は、男性183名(78.5%)、女性50名(21.5%)で、平均年齢は19.3±1.8歳であった。住居は、自宅が136名(58.4%)、一人暮らしが96名(41.2%)、無回答が1名(0.4%)であった。

### 2. 携帯電話・ネットの利用状況

1) 携帯電話・パソコンの保有とネットの接続について  
携帯電話を保有している人は229名(98.3%)であり、自由に使えるパソコンを保有している人は192名(82.4%)であった。また、パソコンを保有している人のうち、そのパソコンをネットに接続している人は161名(82.6%)であった。

#### 2) ネットの利用場所と利用状況について

ネットを利用する人は、229名(98.3%)で、ネットを利用する場所は、自宅が最も多く171名(72.4%)、ついで大学が137名(55.8%)、携帯電話が112名(48.1%)となっており、ネットカフェでの利用は10%に満たなかった(表1)。ネット利用頻度は、1週間に平均4.6±2.4日、1日に平均99.6±120.7分であった。1週間の利用頻度と1日の利用頻度を組み合わせて分類すると、ネット利用が1週間に4日以下で1日99分以下である「低頻度・短時間」の人は84名(34.3%)、1週間に5日以上で1日99分以下である「高頻度・短時間」の人は73名(29.8%)、1週間に4日以下で1日100分以上である「低頻度・長時間」の人は24名(9.8%)、1週間に5日以上で1日100分以上である「高頻度・長時間」の人は64名(26.1%)であった(表2)。

表 1 インターネットの利用場所

利用場所	%
自宅	72.4
大学	58.8
携帯電話	48.1
ネットカフェ	7.3
その他	0.4
複数回答	

表 2 インターネットの利用状況

利用状況	%
低頻度・短時間	34.3
高頻度・短時間	29.8
低頻度・長時間	9.8
高頻度・長時間	26.1

インターネットの利用目的では、検索（調べ物）と勉強のための資料収集がそれぞれ約 90%、60%と多く、ついでホームページ、メールが約 30%、ニュースの閲覧、SNS が約 25%、オークションやネットショッピングが約 20% 弱、ブログが 12% であった（図 1）。

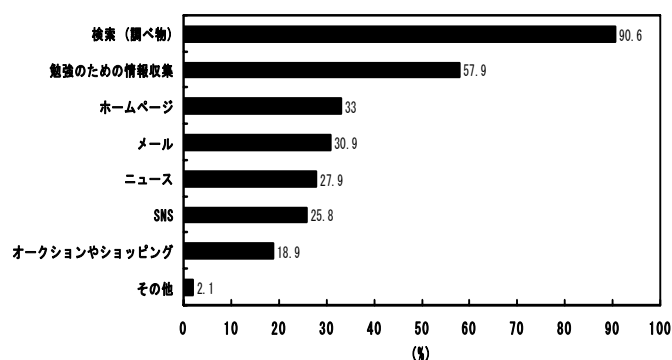


図 1 インターネットの利用目的

3) 利用頻度の 4 つの分類別にみたネットの利用目的について

図 2 に 4 つの分類別に「ブログ」「SNS」「メール」の利用頻度を示す。どの利用目的も「高頻度・長時間」が最も多かった。また、「ブログ」は「長時間」が「短時間」より多く、「SNS」と「メール」は「高頻度」が「低頻度」より多かった。

4) ネットによる他者との交流について

携帯電話やパソコンでの 1 日の送信数は平均  $14.4 \pm 18.7$  通であり、SNS メールや ML を使用している他者と交流をしている人は 98 名 (42.1%) であった。また、ネットやメールを通じて新しい友人や知り合いを作りたいと思う人は 74 名 (31.8%)、ネットやメールを通じて新しい友人や知り合いを作ろうとしたことがある人は 70 名 (30.0%) であった。

3. 友人について

1) 友人のパターンとその人数について（図 3）

ネットや携帯電話など顔を合わせない状況（非対面状況）で出会った友人がいる人（ネット友有群）は 53 名 (22.7%)、いない人（ネット友無群）は 180 名 (77.3%) で

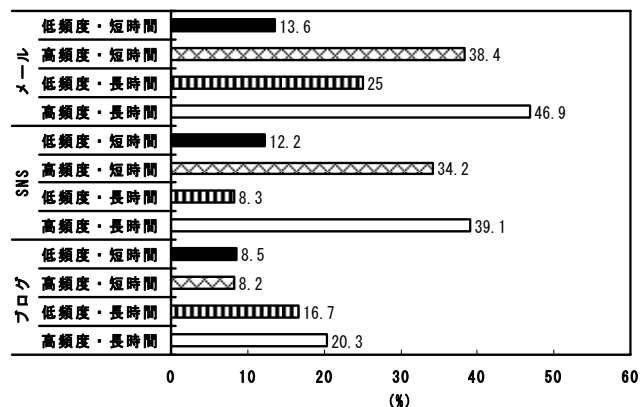


図 2 メール・SNS・ブログの利用頻度

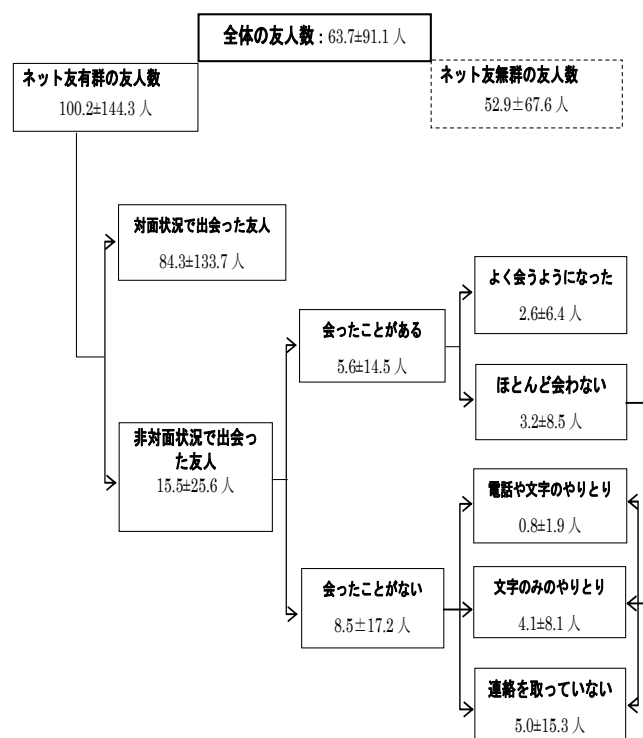


図 3 友人のパターンと人数

あった。全体の友人数の平均は  $63.7 \pm 91.1$  人であり、ネット友有群の友人数は  $100.2 \pm 144.3$  人、ネット友無群の友人数は  $52.9 \pm 67.6$  人で、両群間に有意差 ( $p < 0.01$ ) が認められた。ネット友有群では、学校やアルバイトなど、顔を合わせた状況（対面状況）で出会った友人の平均人数は  $84.3 \pm 133.7$  人で、非対面状況で出会った友人の平均人数

は  $15.5 \pm 25.6$  人であった。また、非対面状況から出会った友人のうち、一度でも会ったことがある友人の平均人数は  $5.6 \pm 14.5$  人であり、その後、よく会うようになった友人の平均人数は  $2.6 \pm 6.4$  人であった。一方、非対面状況から知り合った友人のうち、一度も会ったことのない友人の平均人数は  $8.5 \pm 17.2$  人で、会わないが文字のみのやり取りをしている（電話はしなし）友人の平均人数は  $4.1 \pm 8.1$  人、電話と文字のやり取りをする友人の平均人数は  $0.8 \pm 1.9$  人、連絡を取っていない友人の平均人数は  $5.0 \pm 15.3$  人であった。

## 2) ネット上の友人の有無によるネット利用状況等の比較

ネット友有群とネット友無群で、自宅と一人暮らしの別、携帯電話やパソコンの保有状況、ネットの利用状況、メールの発信数、非対面状況から友人を作りたいか、また作ろうとした経験があるかについて比較した。表3に2群間で有意差の認められた項目を示す。

ネット友有群では、自宅でネットを利用している人の割合が86.3%で、ネット友無群の72.2%よりも有意に多かった ( $p < 0.05$ )。ネットの1日利用時間では、ネット友有群が  $119.7 \pm 117.8$  分で、ネット友無群の  $88.3 \pm 90.7$  分と比べて有意に長かった ( $p < 0.05$ )。また、利用目的が「ブログ」「SNS」である人の割合は、ネット友有群がネット友無群よりもそれぞれ約2倍多かった ( $p < 0.05$ )。ネットやメールを通じて新しい友人や知り合いを作りたいと思うかどうかでは、作りたいと思う人の割合が、ネット友有群では、58.5%、ネット友無群では23.9%で、新しい友人や知り合いを作ることを目的として働きかけたことがあるかどうかでは、作ろうとしたことがある人が、ネット友有群で66.0%、ネット友無群で19.4%であり、いずれもネット友有群の方が有意に多かった ( $p < 0.01$ )。

表3 ネット上の友人の有無によるネットの利用状況等の比較

	ネット友有群 (n = 53)	ネット友無群 (n = 180)
ネット利用場所: 自宅	86.3%	72.2% *
ネット1日利用時間	$119.7 \pm 117.8$ 分	$88.3 \pm 90.7$ 分*
ネット利用目的: ブログ	22.6%	9.4% *
ネット利用目的: SNS	41.5%	21.1% *
ネットやメールで新たな友人を作りたい	58.5%	23.9% **
ネットやメールで新たな友人を作ろうとした	66.0%	19.4% **

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$

## 4. 日常の友人とネット上の友人への期待感

表4にネット友人の有無別にみた日常の友人とネット上の友人への期待感の得点を示す。

### 1) ネット友有群における日常の友人とネット上の友人への期待感の比較

日常の友人とネット上の友人への期待感の平均値をみ

ると、16項目すべてにおいて日常の友人への期待値の方が有意に高かった ( $p < 0.01$ )。16項目別の日常の友人とネット上の友人への期待値の平均の差は1.13であった。日常の友人への期待感とネット上の友人への期待感の差が大きかった項目は、項目11の「仕事を手伝ってくれる」と項目15の「自分の存在を認めてくれる」であった。一方、期待感の差が小さかった項目は、14の「アドバイスをくれる」、項目5の「話に耳を傾けてくれる」であった。

### 2) ネット友有群とネット友無群の日常の友人への期待感についての比較

ネット友人の有無による日常の友人への期待感に有意差は認められなかった。比較的差が大きかった項目は6の「失敗を慰めてくれる」と項目12の「実力を評価し認めてくれる」であった。反対に、ネット上の友無群において期待感が大きかった項目は1、4、5、8、13、15の6項目で、特に項目4の「何とかしてくれる」の差が大きい傾向を示した。

## 4. 考察

### 1. ネットや携帯電話の利用現状

本研究では、携帯電話の保有率が98.3%、パソコンの保有率が82.4%、ネット接続が82.6%、ネット利用率が98.3%であった。ネットの利用場所は、自宅が72%と最も多かったが、大学や携帯電話という人も半数近くおり、場所を選ばずネットを利用していることが明らかとなった。世界青年意識調査<sup>11)</sup>や総務省の調査では、高校生および大学生のパソコンの所持率は85%を超え、携帯電話はほぼ100%、ネットの利用も95%以上で、携帯電話とパソコンの両方からのネット利用が増加していることを報告している。本調査結果も同様な傾向にあった。

本研究でのネットの利用目的をみると、検索が90%、勉強のための資料収集が58%となっており、学業のためにネットを利用する人が多かった。本調査と同様に大学生を対象にした研究では、ネットの利用目的は暇つぶし、趣味や娯楽などが上位項目であり、レポート作成のための資料収集や就職活動の情報を得るために利用している人はこれらに比べて少なかったことを報告している<sup>12)</sup>。この結果の違いは、ここ数年間での大学へのネット導入や情報リテラシー教育の普及に伴って大学生個人の大学でのネット利用率が増加してきたことが考えられる。

ネットの利用目的をブログ、SNS、メールに絞ってネットの利用パターンとの関連をみてみると、いずれも週5日以上、1日100分以上利用している人が最も多く、次にSNSとメールでは短時間でも週5日以上利用している人が多かった。総務省<sup>9)</sup>は、SNSの利用で最終ログインから3日以内にログインしている人が7割を超えていることを報告している。このことから、SNSを人とのコミュニケー

ションツールとして利用されており、短時間でも毎日利用している人が多いと考えられる。

表 4 ネット友人の有無別にみた日常の友人とネット上の友人への期待感

	項目	ネット友有群		ネット友無群
		ネット上の友人	日常の友人	日常の友人
1	あなたが落ち込んでいると、元氣付けてくれる	2.08±1.00	3.16±1.00	3.24±0.79
2	あなたが失恋したと知ったら、心から同情してくれる	1.96±0.95	3.10±0.84	3.05±0.92
3	あなたになにかうれしいことが起きた時、それを自分のように喜んでくれる	1.80±0.97	2.98±0.85	2.92±0.94
4	あなたがどうにもならない状況に陥っても、何とかしてくれる	1.66±0.92	2.72±1.07	2.93±0.81
5	あなたがする話にはいつもたいてい興味を持って耳を傾けてくれる	1.94±0.99	3.04±0.82	3.11±0.72
6	あなたが大切な試験に失敗したとしたら、一生懸命慰めてくれる	1.88±0.98	3.04±0.94	2.92±0.92
7	あなたが元氣が無いとすぐ気付けて気遣ってくれる	1.78±0.91	2.98±0.96	2.93±0.91
8	あなたが不満をぶちまけたい時は、はけ口になってくれる	1.84±1.05	2.84±1.01	2.89±0.98
9	あなたがミスをしてもしっかりカバーしてくれる	1.66±0.90	2.82±0.86	2.76±0.91
10	あなたが何かを成し遂げたとき、心からおめでとうと言ってくれる	2.20±1.14	3.20±0.91	3.12±0.78
11	1人では終わらせられない仕事があった時は、快く手伝ってくれる	1.53±0.76	2.96±0.95	2.96±0.81
12	日ごろからあなたの実力を評価し、認めてくれる	1.82±1.08	3.02±0.88	2.91±0.82
13	普段からあなたの気持ちを理解してくれる	1.70±0.91	2.90±0.95	2.93±0.84
14	あなたが学校やアルバイト先などでの人間関係に悩んでいると知ったら、いろいろと解決方法をアドバイスしてくれる	2.10±1.08	3.04±0.94	2.97±0.90
15	良いところも悪いところもすべて含めて、あなたの存在を認めてくれる	1.80±0.90	3.06±0.90	3.11±0.81
16	あなたを心から愛している	1.70±0.91	2.94±0.96	2.88±0.87

※ネット友有群において、ネット上の友人への期待感 vs 日常の友人への期待感の比較で、すべての項目に有意差あり。(p<0.01)

## 2. ネット上での友人関係

本研究では、1日のメール送信数は平均で14通であり、SNSを使用して他者との交流をしている人は4割を超えていた。また、ネットやメールを通じての新しい出会いを求めている人は3割であり、実際に出会いを経験している人は3割いることがわかった。また、実際にネット等非対面状況で知り合った友人がいる人は2割強であり、平均で15人であった。非対面状況で知り合った友人との関係がその後どのようなようになったかをみると、1度でも会ったことがある友人の数は約3分の1に減少するが、そのうちの半数は良く会うようになったと答えている。また、会ったことのない約3分の2の友人のうち、半数が文字によるやりとりを行っており、残りの半数が連絡を取らなくなったと答えている。このように顔も知らない状況で知り合った人とよく会うようになる関係へと発展することも実際にあることが明らかとなった。

ここで、ネット上で出会った友人がいる人の特徴をみると、友人の数が多く、1日のネット利用時間が長い、ブログやSNSを目的に利用することが多い、ネットを通じて友人作りをしたい、または、友人を作ろうとしたことがある人が多いという結果が得られた。ネット上で形成される人間関係について検討した研究では、ネット上の対人関係に時間を使うほど、ネット友人との関係が深まるが、日常の友人との関係に費やす時間が減少し、友人関係が希薄

化することを報告している<sup>13)</sup>。一方、中村<sup>14)</sup>の携帯メールと孤独感についての研究では、メールの利用頻度が高い人は対面関係も活発で外向性の性格であったことを報告している。また、仲栄<sup>15)</sup>も同様な結果を示している。本研究では、ネット上で出会った友人を多く持つ人は日常の友人の数も多く、日常の友人関係の希薄化はないという結果が得られ、中村<sup>14)</sup>と仲栄<sup>15)</sup>の結果を支持するものであった。このことから、ネット上での友人作りは日常の友人の代用を求める目的で行われるのではなく、友人ソーシャルネットワークをさらに拡大させる積極的な友人作りを目的としていると考えられる。

次に、ネット上の友人がいる人において、日常の友人とネット上の友人へのサポート期待感を比較したところ、すべての項目において日常の友人の方がネット上の友人よりも期待感が高いという結果が得られた。中でも日常の友人への期待が大きかったのは、「良いところも悪いところもすべて含めて、あなたの存在を認めてくれる」といった深い信頼関係を基盤とした内容の項目であった。ネット上の友人への期待と日常の友人への期待がほぼ同等であった項目は、「あなたが学校やアルバイト先などでの人間関係に悩んでいると知ったら、いろいろと解決方法をアドバイスしてくれる」、「あなたがする話にはいつもたいてい興味を持って耳を傾けてくれる」といった相談や話し相手といった内容の項目であった。一方、ネット上に友人がいる

人といない人の日常の友人へのサポート期待感を比較すると両者に差異は認められなかった。このことから、ネット上に友人がいる人もいない人も日常の友人には互いに認め合い、心のよりどころとなるような深い人間関係を期待し、ネット上の友人には、悩みなどの話を聞いてもらうといった相談相手、話し相手としての役割を期待していると考えられる。松田<sup>16)</sup>は、携帯電話の登場により若者の友人関係は決して希薄化しているわけではなく、状況に応じて相手を自由に選んで付き合うという選択的関係を形成していると考察している。本研究結果からも、ネット上に友人を持つことが友人関係の希薄化を招いているわけではなく、それぞれの友人に期待するものが異なっていることから選択的関係を形成しているということが言えるのかも知れない。

## 5. まとめ

本研究では、大学生のネットや SNS の利用状況とネット上での友人関係の構築の実態を明らかにし、サポート期待感からネット上の友人の位置づけについて検討した。その結果、大学生では、SNS などのネット上で他者との交流をきっかけに、実際に会うといった友人関係に発展することが明らかとなった。しかし、ネット上に友人を持つ人はネット社会に傾倒しているわけではなく、むしろ日常での友人とのつきあいが活発であったことから、ネット上の友人づくりはさらなるネットワーク拡大が目的であり、ネット上の友人には適度のサポートを期待しながら、日常の友人とネット上の友人の両者を上手く活用していると考えられた。

## 6. 参考文献

- 1) Cummings, J., Utler, B., Kraut, R., *Communications of the ACM*, **45**, 103-108 (2002).
- 2) 安藤玲子, 高比良美詠子, 坂元章, *パーソナリティ研究*, **14**, 69-79 (2005).
- 3) Kraut, R., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S., Mukopadhyay, T., *Am. Psychol.*, **53**, 1017-1031 (1998).
- 4) Parks, M.R., Floyd, K., *J. Computer-Mediated Commun.*, <<http://www.ascusc.org/jcmc/vol1/issue4/parks.html>>, 1996.
- 5) McKenna, K.Y.A., Bargh, J.A., *Pers. Soc. Psychol. Rev.*, **4**, 57-75 (2000).
- 6) 村田晴路, *広告科学*, **35**, 143-148 (1997).
- 7) 安藤玲子, 坂元章, *日本教育工学雑誌*, **27**, s89-s92 (2003).
- 8) 安藤玲子, 鈴木佳苗, 小林久美子, 樫淵めぐみ, 木村文香, *パーソナリティ研究*, **13**, 22-33 (2004).

- 9) 総務省, *ブログ, SNS の現状分析および将来予測*, <[http://www.soumu.go.jp/s-news/2005/pdf/050517\\_3\\_1.pdf](http://www.soumu.go.jp/s-news/2005/pdf/050517_3_1.pdf)>, 2006.
- 10) 久田満, 千田茂博, 箕口雅博, *日本社会心理学会第 30 回大会発表論文集*, 143 (1989).
- 11) 内閣府, *第 8 回世界青年意識調査* (2007).
- 12) 符儒徳, *東京女学館短期大学紀要*, **24**, 67-97 (2001).
- 13) 安藤玲子, 高比良美詠子, 坂元章, *パーソナリティ研究*, **14**, 69-79 (2005).
- 14) 中村功, *松山大学論集*, **14**, 85-99 (2006).
- 15) 仲栄真美奈子, 国吉和子, *地域研究*, **2**, 135-154 (2006).
- 16) 松田美佐, *社会情報学研究*, **4**, 111-122 (2000).